

読解力を育てる学習指導の在り方

Guiding Elementary School Students to Develop Reading Competence

吉田 人史、 水田 聖一
YOSHIDA Hitoshi MIZUTA Seiichi

はじめに

本稿では、「文学的文章の読解力」を育てる学習指導の在り方について、その一端を述べる。

「文学的文章の読解力」については、「小学校学習指導要領解説 国語編」⁽¹⁾に「文学的文章の解釈に関する指導事項」として、低・中・高学年別に明記されている。

～低学年では、場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと、
中学年では、場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと、高学年では、登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること(以下略)～。

ここに示された「想像を広げながら読む」「叙述を基に想像して読む」「叙述について自分の考えをまとめる」という一連の学習活動を可能にする「読みの力」は、次の二つであると考え

(1)言葉からの想像力

(2)文脈からの思考力

(1)は、文章に書かれたことを映像化し情景や気持ちに迫る能力であり、(2)は、叙述から物語の展開を推し量る能力である。

以下、これらの力を育てる学習指導の在り方について、小学校6年生の国語科の授業実践を中心に述べることにする。

1 教材文の特質と学習目標

授業では、宮沢賢治が書いた「やまなし」⁽²⁾を教材文として取り上げた。

この作品は、広く捉えれば、宮沢賢治のファンタジー短編の一つとしてみることもできるが、成立の過程を考えると、作者の深い人生観が底に込められた作品である。

作品が発表されたのは、大正12年4月8日、「岩手毎日新聞」の紙上である。当時27歳の

宮沢賢治は、そのわずか4カ月前に（大正11年11月末）、彼の作品の最大の理解者であった妹トシを亡くしている。賢治は、妹の死という深い悲しみに出会い、それでも何とか悲しみを乗り越え、人生を肯定しようとして苦しみ抜いた。そうして生まれたのが、この「やまなし」という物語なのではないかと考えられる。

しかし、文章には、「二枚の青い幻灯」（「五月」と「十二月」）に映し出された谷川の情景と、そこに生活している蟹の親子に起こる出来事が描かれているだけで、心を揺さぶられるような感動的なストーリー展開はない。むしろ、読む者の多くが、「これは何を言いたい話なのか」という疑問をもってしまう。が、その一方で、文章上に溢れている賢治独特の比喩や描写には、読み手のほとんどが強い印象をもつ。

この不思議な物語世界に魅かれ、これまでに多くの絵本作家たちが様々な絵画表現で「絵本・やまなし」を創作し^③、たくさん声優たちが種々の読み方で「やまなしを朗読した声」を残している。

この作品は、6年生の子どもたちにとっても新鮮な読後感をもたらし、これまでの国語科の学習で身に付けた「文学的文章を読解する力」を、小学校最終学年の子どもとして再確認するのにふさわしい学習になると思われる。

以上を考察し、学習の目標を次のようにした。

イメージ豊かに読み味わう活動を通して、主題に迫ることができる。

2 文章の視点

「イメージ豊かに読む力」を付けるためには、「文章が書かれている視点」に添って読み、自分の「五感を働かせて追体験すること」が必要である。教材文「やまなし」の文章を検討すると、水中世界を水底にいる蟹の目から見たように書かれている。このことを教師の発問で気付かせることは簡単であるが、それよりも、子どもたちが自ら気づくほうが、意欲的な学習展開になる。意欲化は学力向上の大前提である。

そう考え、作品と出会わせる前に「卒業アルバムに掲載する候補写真の記念撮影」をした。一か所は、校庭にある藤棚の下である。子どもたちは満開の藤の花を下から見上げ、辺りに広がる花の香りを印象深くかいだ。もう一か所は校舎の屋上である。子どもたちは快晴の澄み切った天空を見上げ、まるで深い空の底にいるような感覚に浸った。

また、作文の時間には、教室内の水槽に以前から飼っている泥鰌になって作文を書かせた。題名は「おれはどじょうだ」である。水底にいる泥鰌の視点からの世界を想像し、楽しい「なりきり作文」の学習をした。

これらの体験は、水底にいる蟹の視点で書いてある、「やまなし」という物語世界に入り込み、そこに登場する人物に感情移入し、イメージを広げて読む学習の手助けになっていった。

3 作品との出会い

作品との一回目の出会いは、まず「(文章は見ないで) 耳で聞く (だけ)」という方法にした。

目で追う文字もなく理解の手掛かりになる挿絵もない状態で「物語の世界に出会う」ほうが、より想像力が発揮されると期待したからである。

しかし、一番多かったのは、次のような内容の感想である。

・この話は、なんだかわけがわかりません。

また、こんな感想もあった。

・何のことを、どのようなことと言っているのかわからない。だけど、この前書いた「どじょうの作文」のように、登場する「かにたち」から見た風景がくり広げられているのではないかと思う。

そこで、二回目は、「くわしくは頭の中に入らなかった。一度ゆっくりと読んでみたい。」という子どもの感想を紹介し、作品に「耳と目で出会う（文章を見ながら聞く）」時間にした。

このときは、「二枚の幻灯」で成り立っている構成を、より鮮明に意識させるために、「五月」の場面と「十二月」の場면을、それぞれ別の声優の読み方で聞かせた。

・聞いただけのときよりも、どういう話かはわかった。しかし、何をいいたいのかわからない。

・読んでみると、少し、なんとなくわかってきたようでしたが、やはりよくわかりません。

（中略）わからないけど何かを感じるというような気がしました。わからなくてもきらいになれないような話だと思います。表現がとてもきれいで、水の中が見えるような気がします。

このような出会い方をして、互いの感想を聞き合ううちに、それぞれの子どもたちの心の中に、内容や表現、作者などに対するいくつもの疑問が生まれてきた。自分なりの「こだわり」、つまり「読みのテーマ」が生まれてきたのである。こうなると、子どもたちは、自分のペースで読み進めたいとなる。

4 読みのテーマ

読みのテーマは、そのことが「疑問だから」という理由で生まれる場合や、それがたいへん「気になるから」、あるいは、とても「好きだから」という理由で生まれる場合もある。

いずれにせよ、一人一人の子どもたちが、自分の中に「作品を詳しく読むためのテーマ」を根付かせることは、読解力を育てる学習には不可欠である。

・わたしは、まず作者について調べたいです。なぜこんな文を書いたのか知りたいし、他の作品もこのような感じなのか知りたいからです。

次に、この文を聞いたり読んだりしていて、意味のわからない言葉があるので調べてみようと思います。そうすれば登場人物の気持ちがわかると思います。

それと、題名についても考えてみたいです。「一」の「五月」では、まるで題名のことなんか関係していないようです。

・わたしは、きれいな言葉を書き出していきたいと思っています。その他は、宮沢賢治さんの作った物語を読んでみたいと思います。

5 友達とのかかわり

一人一人が自分の読みのテーマをもつことができれば、次は互いのテーマを知り合うことで、子どもたち同士のかかわりが生まれる。かかわりは、読解力のさらなる向上に繋がる。

授業では、短冊形の小カードに、一枚一項目と決めて、「自分が取り組もうとしていること」を記入させた。それを壁面いっぱいの大型座席表の自分の席に貼っていった。これを見れば、だれがどんなことを追究しようとしているのかが、一目でわかる。

その時、自分の座席に貼る小カードには、その下の部分に、赤丸で囲んで㊦とか、㊧とか、㊨という記号を付け加えるようにさせた。

この意図は二つある。一つは、「読む、書く、話す、聞く」という四つの言語活動を総動員する学習を進めたいということ、もう一つは、互いの追究方法をわからせたいということである。例えば、自分と同じテーマがあり、そこに㊦という記号があったら、その子のところへ行って話し合いをしてもいい、しかし、同じテーマでも、そこに㊧という記号があったら、その子は今一人で書き進めようとしているのだから、行くのは遠慮するのである。

こうして、言わば「学習活動の自由化」とも言うべき時間を取り入れた結果、教室内にいくつものグループ追究の姿が生まれてきた。(もちろん、一人で学習を進めている子もいる。)

その中で、はじめのテーマが解決していったり、別のテーマが生まれたりしていった。

そこで、授業の終わりは、その一時間を振り返るノート学習の時間にした。学習の跡を記録することは、それまでの自分の追究を見直して次時への意欲を高めることになる。

また、ノートに書かれた内容や追究方法が、他の子どもたちの考えを深めるきっかけになる場合には、クラス全体に紹介して、かかわりの渦がより大きなものになっていくようにした。

- ・ぼくは、今日は「クラムボン」を英語辞典で調べました。「クラム」は「かに」という意味で、「ボン」は「うまれた」という意味でした。
- ・ぼくは、〇〇君と題名のことについて話し合いました。それは、題名の意味がわかれば、この話の主題がわかっているいろいろなことがわかると思ったからです。「やまなし」という題で、「十二月」はやまなしのことが書いてあるけど、「五月」はやまなしのことが何も関係していないので、五月の場面はいらないのではないかと話し合っていたら、なにか、五月のかわせみと十二月のやまなしを対比して書いているのではないかということになりました。けれど、まだどうして「やまなし」という題になったかわからないので話し合いたいです。

6 共通課題と全体学習

グループの話し合いでもすっきり解決しないことが、次第にはっきりしてきた。

そこで、「クラス全員で話し合いたいこと」や「みんなで取り上げて考えてみたいところ」を出し合い、八つの「共通課題」を設定した。

- ① 「幻灯」について
- ② 「クラムボン」について

- ③ 会話文について
- ④ 作者の表現の仕方について
- ⑤ 「五月」と「十二月」について
- ⑥ 題名について
- ⑦ 主題について
- ⑧ 作者について

全体学習は、グループ学習の成果も踏まえつつ、①から順に②③と解決することを目指した。しかし、実際の学習では、急に⑦が話題になったり⑧に発展していったりすることもあった。

また、話し合いの内容によって、「やまなし」以外の宮沢賢治作品の紹介が必要になることや、作者の生涯年表を調べるが必要になることもあった。

授業後、子どもたちのノートには、それぞれの学びの手ごたえが累積されていった。

おわりに

以上述べたように、文学的文章の読解力を育てるには、まず、教師が教材文の特質を把握した学習目標を設定し、文章記述の視点に添って読む学習を進めることである。そして、読み手が文章から体験を想起し、五感を活用して想像する学習活動を取り入れること、さらには、文脈から物語展開を予測したり、因果関係を考察したりする話し合いを行うこと等が求められる。

この学習終了後に、ある子どもが書いた感想である。

- ・勉強の一番最初に先生が、「このお話がわかるか」と「このお話が好きか」と、二つの質問をされました。ぼくは、「きらいでわからない」というところに手をあげました。でも、今もう一度先生に同じ質問をされたとしたら、正反対の、「好きでよくわかる」のところに真っ先に手をあげます。たぶん、ほとんどの友達もそう考えているでしょう。(以下略)

子どもたちが求めているのは、自分が今もっている「言葉への感性と理性」を全力活用する学習である。それは、文章読解力を育てる学習指導そのものであると言える。

注

- 1 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社 2009 20頁
- 2 光村図書出版の「6年生用国語科教科書」に昭和46年から掲載されている。
- 3 画 小林敏也 『画本 宮沢賢治 やまなし』パルル舎1985
 絵 葉 祥明 『サンリオ名作童話館 やまなし』サンリオ1988
 絵 安藤徳香 『やまなし YAMA-NASHI』福武書店1986 他、多数。